

あ と が き

「科学的な感性、科学的なものの見方・考え方の育成」をテーマに掲げての第一年次教育研究協議会を目前に控えた10月23日、新潟県中越地方を震源とした中越地震が発生しました。その時点で、既に県内外の大勢の方々から参加連絡をいただいております、延期することによる影響の大きさも一瞬頭をよぎりましたが、中越地方および当校が受けた被害のあまりの大きさに、やむなく延期の判断を下しました。

今回、1月下旬という雪の多い時期になりましたが、教育研究協議会を開催できる所まで漕ぎつけることができました。その間、全国の方々から温かいご支援や激励のお手紙等をたくさんいただきました。子どもたちもそして私たち職員も、どれだけ勇気をいただき元気づけられたことでしょうか。本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

今回の研究を進めるにあたり、「科学的な～」を研究テーマにすることについて、いろいろなご指摘をいただきました。「小学校教育で科学に傾斜するのはいかがなものか」「小学校教育は人間教育の基盤である。全人的な教育が必要である」等々です。全く同感です。この視点を離れての小学校教育はあり得ないと考えます。

私たちがこの研究で「科学～」に託するものは、大きく二つあります。

一つ目は、自然や科学への興味・関心を高め、いろいろな情報をもとに正しい判断、よりよい判断ができる力を育てることです。このような判断ができる力は算数・数学や理科等の科学系教科だけでなく、どの教科でも追求すべきことです。そのため、各教科等で「科学的」ということを、もう少し重視して指導に当たりたいと考え取り組んできました。

二つ目は、科学リテラシーを養うことです。

私たちは、暮らしを便利にするために生み出されたもの（科学の成果）に囲まれて生活しています。ただ、その成果も使い方によっては健康や安全を損ねたり、或いは社会秩序を乱すことになりかねません。小・中学生にかかわるニュースが報道されるたびに科学のすばらしさとともに、それをよりよく活用する力を育てることが、これからの学校教育においては必要だと考えます。

これらのことから、私たちが進めている研究は、小学校教育の本質に沿ったものであると確信しています。しかし、こうあって貰いたいという二つの大きな願いが、いまだ願いにとどまっている部分も多々ありますし、願いとは別な方向に向いている部分もあるかもしれません。今回の教育研究協議会を機会に、多くの方々からご批評をいただき、今後の研究のエネルギーにしたいと願っています。

最後に、本研究紀要の刊行に際し、附属長岡小学校後援会からの寄付金の一部が充てられていますことを申し添え、ご協力いただいた方々へのお礼に代えさせていただきます。

副校長 山田正夫